

学校と博物館の「連携」

～美濃加茂市民ミュージアムの事例～

美濃加茂市民ミュージアム 可児 光生

「平成23年度ミュージアム・エディューケーター研修」 20110927

開館

2000年10月 [総合的な学習時間導入試行の年、1983年から17年間準備]

「歴史民俗資料館」→「郷土博物館」→(施設の複合化)「文化の森・市民ミュージアム」

内容

中小規模な地域博物館 (本館延床約5,900㎡、森全体 約9[㌥])

総合(自然史、考古、歴史民俗、美術、文化史)分野をあつかう。

市直営・スタッフ15名(総務、学芸、学習3係、うち学芸員7名/文化財保護業務兼務)

施設・本館、実習棟、民具展示館＋生活体験館(昭和30年代の養蚕民家を復元)、宿泊アトリエ棟

館の理念・方針

(17年間の紆余曲折から作られた。開館10年たちどれだけ近づけたか?)

「自然との共存」・豊かな里山に立地。自然から学ぶことの大事さを知る。

「博学連携」・博物館のモノを活かし深まりのある学びができる場とする。

「市民参画」・市民の自由な発想と自発的な気持ちが博物館を支える。

「交流と地域」・「博物館」の枠にとられず、地域の交流の拠点となる。

2010年度の状況

利用者数 **8,713名**

(小 7,987名[92%]、中 337名、幼保 389名)

(市内 7,291名[84%] 市外 1,422名[16%])

学級数 **320クラス**

* 利用率 83%(活動日数÷来館可能日数)

* 開館以来の延人数 87,722名(10年半)

参考

人口 55,530人(児童生徒数5,090人・12校)

年間来館者数 87,949名(2010年度)

活用のおもな内容(2010年度) 別冊p36~p39参照

社会(49回) 「米作りの村から古墳のくにへ」「室町文化」(小6)「古い道具と昔のくらし」(小4)

生活(37回) 「はるのずかん」「はっぱの色がかわったよ」(小1)「かまどでごはん」

理科(14回) 「大地のつくりと変化」(小6)「流れる水のはたらき」(小5)・・

国語(8回) 「たぬきの糸車」(小1)「スーホーの白い馬」(小4)

図工・総合(25回) 「葉っぱのお皿づくり」(幼・保)「曲げてねじって」(小5)「ため池を作る」(小4・地域学習)「坪内逍遙からシェークスピア」(中学)「職業体験」(中学)

・小さいながらも各分野を扱う総合博物館

・学校側がより効果が上がると考える教科を選び自由に教材化しようとしている表れ

内容 単元に基づいた授業の教科としての活動

(打ち合わせ→指導案作成[ねらい、事前事後学習、内容...] 別添)

スタッフと体制

- ・学習係(4名) ……非教員(職員1、非常勤3[うち1人教員OB])
 - ・ボランティア ……支援ボランティア数 **のべ299名**
- (6分野[展示、生活体験、アート、伝承料理、イベント、学習支援]、161名登録)
[T1:教員、T2:学芸員、T3:学習係、T4:ボランティア]

児童生徒への直接的支援

バスによる送迎[学校～博物館+現地学習](直営→委託、費用380万)
給食(学校給食センターから配送、冷蔵庫設置)

学校との連絡組織

「文化の森活用委員会」の設置

(各校1名、年3回程度開催。学習活動の工夫、新規プログラムの開発、学校との連絡調整、活用にとまなう教員研修)

記録・報告・公開

- ・博物館HP上ですべての活動を随時公開
 - ・「森の学校たより」(A4両面、随時)の発行
 - ・『活用の手引き・実践集』の発行
- (毎年発行、教員全員配布、130頁程度[実践+新プログラム、子どものアンケート、教員からの改善シート、備品一覧などの活用資料集])
- ・「博学連携フォーラム」の開催
- (2004年～、年1回、公開授業[土曜日の授業参観も]+意見交流・情報交換)

今までおこなってきたこと

①学校ではできない資料の活用の工夫

● 博物館資料

(常設展示室 450㎡、標本ほか、資料整理室[資料が展示されるまでの整理調査準備の光景])

● 屋外

- ・自然[身近な里山にもきれいなものいっぱい]
- ・生活体験館[昭和30年代の復元、生活の知恵がいっぱい]
- ・遺跡[奈良時代の住居址の現地保存、今も拾える遺物いっぱい]



はっぱのいろがかわったよ<生活科1年>

今までおこなってきたこと

②現地学習と関連づけた活動

● 五感(視、聴、嗅、味、触)を積極的にはたらかせる授業

[最上流の川へ行く。川の音を聞き、早い流れを知る。切り立った岸壁、ひんやりとした雰囲気を感じる。]
→



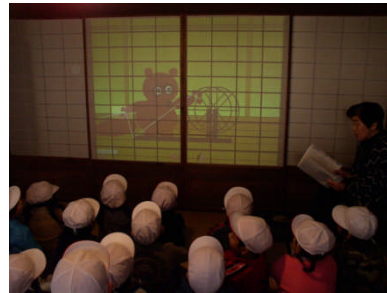
流れる水のはたらき<理科5年>

①学校ではできない資料の活用の工夫 ②現地学習と関連づけた活動



- ・学校にとっての学習効果の向上
- ・理解の深まり

- 岐阜県学力状況調査の結果・「目に見える形」
「大地のつくりと変化」(理科)
「朗読の学習」(国語)
・深い読み・朗読の会の協力



たぬきの糸車〈国語1年〉

- 美濃加茂市外〔遠距離〕学校活用の増加
学習効果向上の手ごたえ・実感
かつて市内で在籍した教員＋口コミ

開館当初 想定していなかったこと。
知識の習得ではないが、大きな反応があった。

③人とのかかわり

学芸員(7名)

「博物館には調査研究する人がいる。」

ボランティア →理念③市民協働

「自分の経験などを活かした活動をし、それを生きがいとしている人がいる。」
「さすがしく無償で働いている人がたくさんいる。」



冬のあそび〈生活1年〉



- 社会の人たちが自分たちに語りかけ接する姿に感動している。「人から学ぶ」こと。「キャリア教育」
- 中学校の職業体験で再来館し「自分たちの学習にはこれだけの人たちが関わっていた」と実感する。

- ①資料の活用の工夫
②現地学習と関連づけた活動
③人とのかかわり

授業時間の減少、予算の削減など



状況がゆるせば、アウトリーチとして学校で行うことも可能(出前授業)



博物館と学校との決定的な違いは？

④博物館という「場」

- 「空気」「空間」「たたずまい」を体感的に感じられる場 (学校の教室では得られないもの。)
- 非体系的で自由にものごとに関わることのできる、知的好奇心をくすぐられる場
- 子どもにとって「驚き」の場



あえて「場」にこだわりたい



学校と博物館の連携 による効果・意義



①地域博物館としての存在意義

●地域の教育力としての機能・使命

博物館が地域の中で、**知的好奇心と関われる重要な場(生涯教育施設)**であることを社会から認知され、必要とされること・・・社会的評価につながる。

●子どもと大人、相互の価値観交流の場

子どもがものごとに関わっている様子、楽しんでいる場(「大人」にとって「訳のわからないもの」・・・現代美術、前衛演劇・・・)を大人が見ること。そのすがたを見て大人が感じる。大人と子どもの「関わり方」が交流される。

学校と博物館の連携 による効果・意義



②「博物館」育ちの市民

・授業にとどまらず、ふだんの生活の一部として、学ぶことの楽しさや**知的好奇心**を持ち続けるひとに、文化を愛するひとに、なってほしい。

・博物館や文化に対しての強力な理解者になる。

(1) 授業後の子どもたちの行動の広がり

6年間授業を受けた卒業生にアンケート

(2006年度から毎年実施、詳細は『実践集』)

考察と分析の3つのキーワード

☆ 知識・技術

教科学習へ反映する気づき、「学力向上」

☆ 心・感性

自由な学び、博物館やかかわった人へ思い

☆ 行動の広がり

生活のなかでの関心の深まり、家族、社会とのかかわり

- ・あらためて来館、質問、調べた [11.0%] (22年度)
- ・野外学習の現地を再訪問した [11.4%]
- ・他の博物館へ行った [11.2%]
- ・夏の自由研究に活かした [7.7%]

→ このポイントの向上。授業は次への活動の1つのきっかけ。

(2) 授業以外での子供たちとのかかわり

「子どもわくわくプログラム」の実施 (休日の子どもたちへ)

● 「ふらっとみゅーじあむ」 …… 広く

(夏休みを中心に毎週水曜日、当日参加、創作系、定員100名程度)

● 「フォレストくらぶ」 …… 深く

(会員制、テーマを設定して年8回実施、定員20名)

かつては「親がこどもを連れてくる」→「子どもが親を連れてくる」現象

美濃加茂市民ミュージアムとしての思い

・「子どもとしての子ども」ではなく、社会の一員として「市民としての子ども」としての視点をもって接していきたい。





事前の打ち合わせ



古い道具と昔の暮らし 授業の様子



古い道具と昔の暮らし(複数のボランティアが関わる)